

吉田宗恂とその周辺—コンピュータと図書館を活用して

(6) 京大近衛文庫の医方大成論抄

島野達雄

1. 京大近衛文庫の医方大成論抄の著者は誰か？

宗恂の医方大成論抄(寛永 9 年整版本. 巻尾に天正 3 年宗恂 18 歳の識語あり. 早大所蔵. 以下, 早大本)の本文および頭注の読み下し文のパソコン入力を半年ほどでほぼ終えた.

ここでは, この早大本と, 前稿で紹介した, 京大近衛文庫の無刊記古活字版・医方大成論抄(以下, 近衛本)とを対比し, 近衛本の著者が宗恂と想像(?)できる理由を挙げてみよう. 以下, 「近上 3」などは近衛本・上巻の pdf ページ番号を指す.

2. 曲直瀬道三一溪と谷野一栢

近衛本の上巻巻頭には, 宗恂の師である曲直瀬道三一溪の名がみえる.

王元福序の「医家者流所蓄方書何」に対して「…一溪翁ハ以医家附于陰陽家者流之内也」(近上 3)と注釈がある. ここから, 近衛本の著者は道三一溪より若年と考えてよいだろう.

道三一溪の名は, 対比表 11, 12, 13, 14, 15 番にあらわれる. 13, 15 番からは「一溪相伝」ないし「道三相伝」という書があったことが想像できる.

また, 「風」の「三日風懿者奄忽不知人也」の注釈として, 「一栢ノ義ニ懿ハ韻書ニ美也ト有. 美人ノ柳腰ノ如ク嫋嫋物弱キヲ云也ト」(近上 10)とあり, 著者が谷野一栢ではないこともわかる. (近衛本には「一義」が 30 か所以上登場する. 「一栢ノ義」かもしれない. 「一説に」または「ある解釈では」の意味かもしれない.)

3. 曲直瀬道三玄朔の可能性

早大本の王元福序「宗文書堂」には, 「東井先生曰く, 書堂の号なり」(早上 4)と曲直瀬道三玄朔(号は東井. 二代目道三)の名が登場する. この文は, 近衛本の「宗文書堂 書堂ノ号也」(近上 2)と一致しており, 近衛本の著者が玄朔である可能性を示している.

また, 早大本の頭注(対比表では■で示した)には, 13 件の「東井翁曰(云)」があらわれ, うち 4 件が近衛本とほぼ一致する. 以上, 対比表の 2, 3, 4, 5, 6 番を参照してほしい.

しかし, 近衛本「水腫」に「東井考師曰, 裹ノ字ノ上ニ目ヲ加字則義通. 然則月裹裏訓ヘキ也」(近下 32)とあり, 著者自身が「東井考師曰」と記すとは考えにくい.

さらに, 対比表 4 番の近衛本は, 東井翁云に代わって「講云」としている. これは 1 番の「講説ニ曰」と同様, 誰かしら「医方大成論」を講義した者がおり, 玄朔がそれを聴講

し、抄録を作った可能性を示している。むろん近衛本の著者もこの講義を聞いたであろう。

4. 医方大成論の講義

鈴木博「医方大成論抄における用語の違いについて」（国語学（111）p39-49, 1977-12 国語学会. Cinii で検索表示が可能）によれば、「天正7年（1579）頃に曲直瀬玄朔（東井・二代目道三）が医方大成論を講じたが—— 一部に一溪（初代道三）の講も含まれる —— その聞書と思われるカナ抄が東京大学国語研究室と京都大学国文研究室とにある」。

つまり、一溪が玄朔以前に医方大成論の講義をおこなっている！

近衛本の「講説ニ曰」と「講云」は、この一溪の講義を指すのではなかろうか。

対比表 8, 16 番の早大本・頭注「■立云」は、近衛本とほぼ内容が一致している。前稿で述べたように、「立」は、おそらく秦宗巴（1550-1607. 号は立安）であろう。この「立」もまた、道三一溪の講義を聴講したのであろう。

5. 吉田宗恂が近衛本の著者か？

近衛本の「恂曰」（対比表 7, 8, 9, 10 番）すなわち吉田宗恂も、道三一溪の講義を聞いたのであろう。早大本には「道三曰」「師曰」が 20 か所以上もある。ここで思い起こされるのが、早大本の巻末にある「天正乙亥孟冬良日 意庵宗恂」の識語である。天正乙亥すなわち天正3年（1575）宗恂は 18 歳にして医方大成論抄をまとめた。

とは言うものの、4 か所の「恂曰」だけを根拠に宗恂が近衛本の著者であると考えるのは、想像の域を出ない。

今後は、鈴木博氏が指摘された、東大と京大に写本として残っている、玄朔の医方大成論抄をはじめ、道三一溪、月舟、一栢、秦宗巴などの著述と、早大本、近衛本との比較検討を進めたい。（月舟と一栢からの引用は宗恂の本草序例抄にもある）

近衛本のパソコン入力と比較的はやくできると思っている。

【近衛本と早大本の対比表】

早大本は、全 5 巻が 2 分冊になっており、上は 1, 2 巻、下は 3, 4, 5 巻を示す。■は頭注。数字は、近衛本、早大本ともネットで公開している pdf 画像のページ番号を示す。

	近衛本	早大本
1	南北、 講説 ニ曰、或云陰陽之義、或限江南江北、皆非也。畢竟南北ハ含東西云ノミ。仮令曰春秋、而不云冬夏ノ類也。此義佳也。（上 2）	又、古説に陰陽の義なり。皆、非なり。畢竟南北は東西を含めて云うのみ。春秋を曰て冬夏を云わざるの類なり。（上 2）
2	宗文書堂 書堂ノ号也。即其書堂ニテ刊行。（上 2）	板をほる堂の名なり。この医方をも板行するなり。 東井先生 曰く、書堂の号なり。（上 4）

3	諸藝中當以為甲 甲ハ十干之首, 言ハ第一也. 医為百工之長之謂也. (上4)	■為甲—— 東井翁 の云, 世に芸能多けれども医道が長なぞ. 医は百工の長とあるぞ. さて甲は初なり. 十干の首 (はじめ) ぞ. (上7)
4	講 云悪寒之貞似酒水也. 素問の音釈云洒也蘇猛ノ反寒驚貌洒浙上所下反下音昔洒々時洒浙イ時ト音別可読耳. (上16)	■ 東井翁 云, 素問音釈に洒は蘇猛の切. 寒慄の貞. 悪寒してをののく也. (上28)
5	沈伏 暑邪陽衛ヲ傷故ニ表氣絶シテ脈沈伏ス. (上18)	■ 東井翁 云, 暑熱は表の陽衛を傷るに因る. 表の氣絶する故に沈伏す也. (上31)
6	平胃散五苓散合テ各胃苓湯ト胃ハ消食五苓去暑邪也. (上19)	■ 東井翁 曰, 五苓は暑を去り, 平胃は食を消す. 故に初期に傷食を兼ねるを治するなり. (上33)
7	恂 曰每未即見ノ四字前後不連続, 蓋衍文也. 又按, 見ノ字下ニ當有如子. 然則頗義通. (上4)	按ずるに「每未即見」の四字, 前後に相 (あい) 連続せず. 蓋し衍文なり. 又按ずるに「見」字の下に當に「如」の字有るべし. 然る則 (ときん) ば頗ぶる義通ず. (上7)
8	恂 曰傳陽ヲノ点佳也ト恐ハ非乎. 惟自初発次第ニ陽証ニ傳行ト云コトワ如有所見謂胃熱則或如有鬼神. (上24)	■ 東井翁 曰, 太陽より陽明に傳, 陽明より少陽に傳, 少陽より太陰に傳, 太陰より少陰に傳, 少陰より厥陰に傳. 是れ大法なり. (上38) ■ 立 曰, 掌に曰, 傷寒傳變陽經先ず病を受ける. 故に次第傳, 陰經に入る. (上39)
9	飧泄 恂 曰因夜食飽食又湯漬ノ飯也. 言其所下之状似飧也. (上39)	飧泄 夜食飽食に因る. 飧は熟食なり. 又飧は湯漬け飯なり. 言ば其の下すところの状ち, 飧に似たり. (上68)
10	恂 曰此句與前後文不相続, 當置刺出毒血ノ下歟. 蓋居處ナシ. 故此處ヲカル. 而テ是ヲカク也. 按ニ上ノ文針時以病者為好ノ句, 別様見. 則恂ノ義佳也. (下58)	此の句と前後の文, 相続かず. 當に刺出毒血の下に置くべきか. 蓋し居所無き故に此處を借りてこれを書すなり. 針時に——為好句は別段にこれを見たり. (下92)
11	口淡 一溪翁 曰凡病証温熱実証タリトイエトモ, 口淡ヨリト云テ小便白濁ニ至. 七証ミナ虚証ナリ. (下23)	口淡—— 立 曰く是より虚証の疢を云ぞ. 口淡とは美食も不好味云ぞ. (下49)
12	由熱中所作小便 一溪 曰中熱ニヨッテ食ユウシテ水トナル故ナリ.	小便進むところの飲食より多し. 道三 曰く中焦に依り食を以て融して水と為る故に——

	(下 28)	と曰う。(下 53)
13	一溪翁相伝曰肝清涿府汚濁ノ疾ヲウケス故胃代肝受病合五蔵也ト。シカリトイエトモ錢氏説ニ犬癩アリ。(下 42)	道三相伝曰く肝は清淨の府。汚濁の疾を稟(う)けず。故に胃、肝に代て病を受く。五蔵を合すなり。然りと雖、錢氏が説に犬癩有り。(下 66)
14	脾虚アツテ一溪曰脾ノ字マサニ肺ヲツタウヘキ焉。誤也。(下 44)	道三曰く脾の字當に肺の字に作るべし。伝写の誤りなり。(下 68)
15	凡此論八癩未合理耳。八癩之説医林一溪翁相伝及此大成各不同不詳耳。(下 51)	凡そこの論、八廓未だ理に合わざるのみ。道三相伝に曰く離火は心火廓。坤土の脾地廓。兌金は肺澤廓。乾金は上焦天廓。坎水は腎水廓。艮土は中焦山廓。震木は肝雷廓。巽木は下焦風廓。皆六府に属すなり。(下 79) 八廓の病形、詳に医林集要に見たり。此の論、道三相伝及び大成諸論と各同じからず。詳にせざるのみ。(下 79)
16	諸飲の論ス玉機云按古方謂四飲生六証者即四飲加伏飲留飲也。或云五飲者即留飲伏飲合為一証云々。(上 48)	立云、玉機に曰、按古方謂四飲生六証者、即四飲加伏飲留飲なり。或は云、五飲者即留飲伏飲、合して為一証なり。(下 16)

注：この対比表は、近衛本と早大本のなかで「東井」「一溪(道三)」「恂曰」などを調べ、両本に共通する記述があるもののうち、一部だけを表示している。

おまけ【読んだ本・見た本 2018 春休み編】

①漢文訓読に関連して、言語学者の鈴木孝夫と田中克彦の本をそれぞれ5, 6冊読んだ。

二人は好対照で、鈴木は「漢字の良さ」を活かす、とする意見。たしかに英語で直径は diameter, 半径は radius で、漢字をつかえば、半径が直径の半分であることは子供でもわかるが、英語だとわかりにくい。ただし、名前は公的には全部ひらがなに統一し、個人的に漢字表記をすればよい、という説。田中は『漢字が日本語をほろぼす』という著書があるくらいで漢字廃止論者。ただし、「山」「川」「馬」などの漢字をロゴマークのように世界の子供に現地語で「訓読み」させると、喜んでおぼえるだろう、という説。この二人、ライフスタイルも好対照で、とくに鈴木のエコライフは徹底している。

②1月の和算ゼミで発表した漢文訓読の形式言語学に関連して、チョムスキーの著作および解説本を10冊ほど。チョムスキーは、先駆者としての業績は認めるが、(1)引用がやたら多い。(2)Xバー、 θ 理論、ミニマリストなど隠語(?)だらけ。(3)言語学に数学を応用すると言っているが、実際は大したことはない(『新・自然科学としての言語学』にある黒田成幸の論考も「 ζ (ゼータ)の2分木のグラフは句構造文法に似ている」と

いう程度のもの)。(4)例文が全部英語。以上の理由により承服しかねる。詳細な批判を知るには、町田健『チョムスキー入門』光文社新書がおすすめ。

- ③本草序例抄，医方大成論抄に関連して韻書および解説書を数冊。『古今韻会挙要』の目次を作るかどうか目下思案中。中澤信幸『中近世日本における韻書受容の研究』がおすすめ。